

SOKYO
ATSUMI



小島 修 《Nostalgia22-01》、2022、陶・ガラス、H80 × W92 × D101 cm
Photo by Yuji Imamura

小島 修

Works 2008–2022

プレス内覧会 2022年8月5日(金)

2022年8月6日(土) – 2022年9月14日(水)

※夏季休廊 2022年8月14日–8月22日

SOKYO ATSUMI

140-0002 東京都品川区東品川 1-32-8 TERRADA ART COMPLEX II 3階 #304

開廊時間:11:00 – 18:00(火 - 木) 11:00 – 19:00(金・土) 休廊日:日・月

SOKYO ATSUMI

140-0002 東京都品川区東品川 1-32-8 TERRADA ART COMPLEX II 3階 #304

+ 81 (0)80 7591 5212

プレスリリース

SOKYO ATSUMI では、小島修 個展 「Works 2008-2022」 を開催いたします。アメリカや台湾で活動を広げてきた小島にとって、15年ぶりとなる東京での個展となります。本展では信楽で制作した最新作《Nostalgia》シリーズの他、90cm超の大型陶板、新しい方向性を示した新作の小作品など、約10点を展示いたします。2019、2020年の艸居（京都）で開催された個展に引き続き、SOKYO ATSUMIでの初個展となります。

陶土のブロックや原土、瓦などを積み上げて表現される小島の作品は、所々に配された釉薬が溜まり、流れ落ちることで、湧水や川泉などの力強くダイナミックな自然の風景を描写しているよう見えます。その一方で、小島は自身の作品について下記のように語ります。

私が作品に使用する陶土のブロック・原土・瓦は、城壁や石垣に使用されている石やレンガのイメージを呼び起こすものかもしれない。これらが意味するのは、文明によって創出されたテクノロジーの象徴である。集積された物体は、経年によって人々の記憶から忘却され、今にも朽ち果てようとしている。それらは、廃墟や廃屋とも捉えることができる。絶命寸前の足掻きとでも言うべきであろうか、未だにその一部は光彩を放ち続けている。

人間は、過去の記憶に終始囚われ、支配されている。私の作品「Nostalgia=懐旧」は、過去の記憶を呼び起こす、現代のランドスケープといえるだろう。

国や社会など、人間が構築したものはいつか崩壊する。人類社会の繁栄は永遠に続くはずもなく、いつでもどこかに綻びや歪みがある。その綻びや歪みが、時を経て肥大化してゆく様は栄枯盛衰を思わせる。だからといって、私は世界の危機を訴えたいわけではないし、目の前に大きな危機があるわけでもない。極端に言えば、反戦でもなければ反核でもない。私は世界のすべてに絶望していない。むしろ、社会の綻びや歪みの中に見え隠れする哀れさにも、それぞれの美が存在しているのではないかと感じている。

本展では、小島が2008年から2022年にかけて制作した作品の中から、制作活動において転機となった貴重な作品を展示いたします。本展における最大の作品《Nostalgia17-TWt-01》は1トンを超えており、2017年に国立台南芸術大学で制作しました。この作品は台南の伝統的な農家の屋根瓦を素材としています。時代とともに建築様式がコンクリートに移行したことで、台湾では屋根瓦が姿を消しつつあります。小島は町で最後の一軒となった瓦屋から瓦を引き受け、その瓦を積み上げたり変形を加えることで、消えつつあるものの儚さの中に存在する美を表現します。

《Nostalgia》というシリーズは、ロシアの伝説的映画監督 アンドレイ・タルコフスキーの傑作「ノスタルジア」(1983年)にインスピレーションを受けたと小島は話します。映画「ノスタルジア」は、タルコフスキーらしい洗練された画面構成で知られていますが、作中では繰り返し教会や石造りの温泉、あばら屋が映し出され、重要な役割を果たします。それらの建築物はまるで廃墟のようでもあり、朽ちながらも堂々とした姿は、逆説的な意味で往年の華やかだった頃の様子を彷彿させます。「ノスタルジア」という過去の記憶が重要な意味を持つこの映画に、小島も自身の作品が内包する時の流れを感じ、共鳴したとのだと述べています。このように、小島は素材の背景にある歴史や、これから時を経ることで変化し続ける作品の姿を想像しながら制作に取り組んでいます。

ブロックを積み上げる小島の制作手法は、作家自身が話すように人間がその営みの中で見出した城壁や石垣の作り方とよく似ているといえるのではないのでしょうか。人間にとって最も根源的な素材の一つである「土」を、別の用途に役立てるために加工することは、文明の在りかたとそのまま重なります。その歴史の延長に芸術が誕生する時間軸の中で、今を生きる小島がどのように作品と向き合い続けてきたかを一望できる展覧会となっております。是非この機会に本展をご高覧くださいようお願い申し上げます。

作家略歴

小島 修(こじま・おさむ)

1973年福井県生まれ。現在は三重県にて制作。2016年国立台南芸術大学応用研究所修士課程卒業。滋賀県立陶芸の森(甲賀市、滋賀)、アーチャーブレイ財団(モンタナ州、アメリカ)、国立台南芸術大学(台南市、台湾)などにて滞在制作プログラムに招聘。これまで新北市立鶯歌陶磁博物館(新北市、台湾)、ジェイソン・ジャックギャラリー(ニューヨーク、アメリカ)などにて個展を開催し国内外で作品を発表。2019年、2020年には艸居(京都)で個展を開催。主な受賞歴には、2005年第7回国際陶磁器展美濃2005陶芸部門銅賞(同2014年)、2006年秀明文化財団第17回秀明文化基金賞、2012年台湾国際陶芸ビエンナーレ金賞(2016年同ビエンナーレにて大賞)がある。主なコレクションは、京都市京セラ美術館(京都)、滋賀県立陶芸の森、アーチャーブレイ財団、新北市立鶯歌陶磁博物館、サミュエル・P・ハーン美術館(フロリダ州、アメリカ)など多数。

出品作品(一部)



小島修 《Nostalgia17-TWt-01》、2017
陶・ガラス、H129 × W149 × D95 cm



小島修 《紫紺 22-06》、2022、
陶・ガラス、H47 × W58 × D27 cm

是非、貴社・貴誌にてご紹介いただけますと幸甚に存じます。
掲載用、写真の貸出などご質問がございましたら下記までご連絡頂けますと幸いです。

プレス担当(東京): 金田幸
〒140-0002 東京都品川区東品川 1-32-8
TERRADA ART COMPLEX II 3階 #304
miyuki.kanada@gallery-sokyo.jp
Tel:080-7591-5212